

「夢見る少年の昼と夜」参考資料一覧 第140回 福永武彦研究会 2013.5.26 配布資料
 * 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名 (出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「夢見る少年の昼と夜」初出と書誌	—	福永武彦全集 第4巻 附録他より (新潮社)	—	1	・初出：「文学界」昭和29年(1954)11月号 ・単行 1. 「心の中を流れる河」初版。昭和33(1958)年2月東京創元社刊。四六判、フランス装、函入。装丁：菅野陽。本文269頁。内容：「夢見る少年の昼と夜」、「秋の嘆き」、「風景」、「幻影」、「死神の馭者」、「一時間の航海」、「鏡の中の少女」、「心の中を流れる河」。 2. 「心の中を流れる河」新版。昭和44(1969)年9月人文書院刊。四六判、紙装、函入。装画：駒井哲郎。本文272頁。内容は、1に同じ。及び「再版後記」(著者)。 3. 「夢見る少年の昼と夜」新潮文庫版。昭和47年(1972)11月刊。カバー装画：麻生三郎。本文317頁。内容：「夢見る少年の昼と夜」、「秋の嘆き」、「沼」、「風景」、「死神の馭者」、「幻影」、「一時間の航海」、「鏡の中の少女」、「鬼」、「死後」、「世界の終り」、及び「解説」篠田一士)。 4. 「夢見る少年の昼と夜」限定版。昭和54年(1979)2月槐書房刊。限定201部、うち著者版26部、A版50部、B版125部。B36取変型(120×167)、総革装、紙装夫婦函入。装画2葉、装丁と装画：脇田和。本文103頁。内容：「夢見る少年の昼と夜」一篇、及び「ノオト」(著者)。
1	福永武彦全小説 第4巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第4巻 福永武彦全集 (新潮社) 第4巻に所収	1974/01	3 (全集)	「夢見る少年の昼と夜」は愉しげに一気に書いているように見えるが、周到に考え抜いたあげく手を下したもので、これによって多少とも新しい方向を開こうと試みた。文藝時評で平野謙さんが褒めてくれて、それが千万の味方を得たように有難かった。ところが翌月の或る雑誌の座談会で、高名な一批評家が同席の平野さんにくっついてかかって、ああいう小説を褒めるとは怪しからん、あれのどこがいいのか聞きたいものだとか聞き直して、平野さんがたじたじとなる場面があった。私はその時、ああ旧派の批評家にはこの作品はとも分らないだろうが、味方とたのんだ平野さんも腰が弱いなあと慨嘆した覚えがある。その時の某批評家の悪口は今に忘れない位だから、よほど腹に据えかねたに違いない。私はそれ以後(平野さんを信用しなかったわけでは決してないが)批評家に対して一種の不信感を抱くようになった。つまり「夢見る少年の昼と夜」の文壇的反響は私に深い傷を負わせたようである。引用)
2	「夢見る少年の昼と夜」限定版ノオト	福永武彦	「夢見る少年の昼と夜」限定版 (槐書房) 福永武彦全集 (新潮社) 第4巻に所収	1979/12	4 (全集)	「夢見る少年の昼と夜」はサナトリウムを出た翌年、昭和29年の夏、信濃追分の小さな山小舎で書いた。前年の暮に加藤道夫が短い生涯を終え、彼が追分に建てたバンガローを未亡人から譲り受けて、そこで夏休みを過ごすことにしたその最初の夏である。(中略) さてこの小説は気楽に思い出を綴ったように見えるが、思い出というわけではない。確かに私は父一人子一人に女中のお玉さんと三人暮らしで、小学校の上級の頃は昔の小石川区の雑司ヶ谷に住んでいて青柳小学校に通っていた。しかし事実を記憶に従って書いたとは言えない。それは私が過去の事実に対して忘れっぽいという理由もあるが、事実を事実として書くことが私の小説観に反していたためである。つまり私は一つの小説世界を築くためには事実よりも想像力の方が大事だという方針に立っているため、生じか思い出したことがあったとしても、それがこの小説にふさわしくなければ容赦なく変形させたり削り取ったりした。従って作中のお鹿さんは懐しいお玉さんとじゃ似てもいらないし、先生や友達などもそっくり写したわけではない。それにこの主人公の少年にしても当時の私とはまるで違っているだろう。太郎は私がそれらしく造型した人物で、私は過去を懐かしむ想いからこの小説を書いたわけではなかった。(中略) 「夢見る少年の昼と夜」は私がまだ若かった頃に、といってもその時私は既に36歳だったが、他の誰もが書いたことのないような小説を書こうと思って、試みた作品の一つである。そのために多少技巧が勝ちすぎていて、毀誉褒貶を浴びた。今の私ならもう少し平明に書くところかもしれない。しかし私がこれをサナトリウムを出た1年後に書いたということは、絶対安静の何年間かの間に私の中に深く沈んでいたものが溢れ出したのであり、それはこの昭和29年夏という一時期の、それ以前にも書けずそれ以後にも書けないような何ものかを持っていただろう。それは11歳の少年がただ彼の11歳の時にのみ生きていたということ、本質的には同じであったろう。作品も人生のように、そういう意味では一つの機会というにすぎないのである。昭和53年12月 (引用)
3	「死の島」と福永文学対談)	福永武彦 篠田一士	「新刊ニュース」228号 福永武彦対談集「小説の愉しみ」(1981年1月)所収	1971/10	12 (再録)	篠田：『心の中を流れる河』の『夢見る少年の昼と夜』というのね。あれ大好きなんだ。ところがこれはなんか非常に文壇的には評判が悪いんだそうだね。 中略 福永：やっぱりちょっと氣どったようなのが気に入らなかつたんでしょう。片かなが出てきたり……。 篠田：しかし、あの少年の幻想の内外両側をにらんだうえんで実によく書いてあるし、それから、そういうことを別にしても、あんな美しい日本語というはないと思うんだ。大変オリジナルなものだと思いますよ。 福永：あの作品にはまあ自信があった。(引用)

2 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	主要モチーフからみた福永武彦	柘植光彦	国文学 解釈と鑑賞 1974年2月号 憧憬の美学 堀辰雄と福永武彦	1974/02	6	(「母」のモチーフについて) 福永武彦自身の過去意識における最大の欠落部分は、母の記憶である。したがって、無意識の領域を掘り下げて、意識に欠けたものを補おうとする福永武彦の創作方法に着目するかぎり、その文学は、「母」を追い求める文学だとも見ることができる。 「母」は、福永作品のなかに、ありとあらゆる姿で現われる。次項の「少女」は母の最も純粋化された姿だが、「影の部分」では直接の欲望の対象として、「夢見る少年の昼と夜」ではメドゥサやデリダのように男を死へ誘う魅惑的な女神の像として、「河」では死者の国から自分に呪いをかけてくる憎しみの霊として現われてくる。(引用)

3. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	雑誌月評	久保田正文	「読書タイムズ」 昭和29年10月25日	1954/10		少年の心理へちかべたに即しすぎて曾野 綾子)ほどの芸が無くなった。感覚的な新鮮も、心理的な裂れ込みもないこういう作品はさんざん書かれたような気がする。今さらどうして福永が……と思う。(引用)
2	文芸時評	本多顕彰	「東京新聞」 昭和29年10月27日	1954/10		別にいうことはないが、読んで楽しく、汚れた心の洗われるような作品。中略)西欧を身につけつゝある福永が、神話に魅せられるということは当然であろう。日本文学が世界文学に通ずる運河が掘られるのは、案外、こんな古い道を通じてであるかもしれない。(引用)
3	文芸時評	大島泰正	「朝日新聞」 昭和29年10月30日	1954/10		「夢見る少年の昼と夜」(文学界)のように、一挙一動をギリシャ神話の士師に結びつけて意義付けをなし得る病的におませな都会少年があるとすれば、私はこのメルヘンの作為の強さにただただ疲れる読者でしかない。過剰の神話は現代の詩情を益々乏しくする。(引用)
4	文芸時評	高見順	「中部日本新聞」 昭和29年10月29日	1954/10		題名通り夢想がちな少年の昼と夜を、少年に即して書いている。この、少年の心で書くということは、これもむつかしいことであって、下手すると、他愛のない童話になってしまう。その危険を避けるために、これまで多くの作家は、少年を大人との交渉の面において書いてきた。この小説にも、それはあるが、飽くまで少年の世界のなかでそれを書いている。そのむつかしさの方に、若い作者の野心が一反リアリズムのむつかしさよりも、それの方に注がれているが、反リアリズム手法の実験がここでも意識的に行われていることを見のがしてはなるまい。(引用)
5	11月の文芸誌から	花岡大学	「大阪新聞」 昭和29年11月6日	1954/11		「夢見る少年の昼と夜」は、若い側に於ける華々しい野心と饒舌を代表するものとして本月諸作品中の白眉とおせるとはいえ、なおかつわずかに長与の足もとに這いよってよたよたしているのは、西欧の新しい方法や形式のみでは容易に解決できぬ文学のきびしさを物語るものであろう。(引用)
6	文芸時評 11月号	平野謙	「図書新聞」 昭和29年11月6日	1954/11		佳作であり力作でもある。早く母親を失った鋭敏な感受性をもった11才の少年を主人公にして、その一日の行動を描いた作だが、いかにも題名どおりにキッチリ描きあげられていて、それがこの作のプラスでもあればマイナスでもある、と思った。(引用)

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
7	文学きのうきょう	無署名	「新潮」昭和29年12月1日	1954/12		ギリシア神話というものは、昔から多くのすぐれた作家の想像力を美しく刺戟するものらしい。福永の小説を読んでいると楽しいし、どういわけか、この人は幸福な人なんだなあと感じられる。(引用)
8	文芸時評	花田清輝	「新日本文学」 昭和29年12月1日	1954/12		ずいぶん、うまい小説だな。1920年代なら天才だといわれたかも知れん。(引用)
9	「夢見る少年の昼と夜」解説	篠田一士	「夢見る少年の昼と夜」新潮 文庫 解説	1972/11	6	<p>ここには、母はなく、父も遅くならないと帰ってこない、孤独な少年の内面が目もあざやかなイメージによってえがきだされている。(中略)</p> <p>少年の夢の内面へできるかぎり深く入りこみ、その夢をわがこととして経験しながらも、たえず、それを一つの客体、すなわち、一個の形姿を具えたものとして眺める眼ざしを読者は与えられることになる。そこにこそ福永氏の少年物の不拔の獨創性がかがやくわけだが、これを實地に即して、多少とも具体的な説明を加えるならば、この作品を構成するナレーションには三種類の記述法が行われている。まず会話を含む一般的な叙述法はもちろんのこととして、片仮名書きによる、いわゆるモノローグ・アンテリユールの部分、そして、夜、床に入って少年が眠りのなかで実際に経験する夢の細目を長々と物語ってゆく最後の記述 — これら三つの記述法がちょうど三つの楽器を鳴らす音のように、それぞれ個性のちがった音色と響きを保ちながら、つねに深々としたハーモニーをつくりだしてゆく。このハーモニーに耳を傾ければ読者は夢の妖しい美しさに恍惚とできるが、だからといって、その和音を形づくっている三つの楽器の鳴らす音のそれぞれのありかたを一瞬たりとも忘れることはできない。少年の夢と大人の眼ざしの絶妙な共存の秘密はここにある。(引用)</p>

4. 過去の福永武彦研究会における発表・討議

No.	タイトル	発表者	例会	年/月	要旨
1	「夢見る少年の昼と夜」と「退屈な少年」における福永の原型	鶴見浩一郎	第68回研究会における発表 HP 例会報告 2)より	2002/06	<p>福永の作品にはしばしば「少年」が重要な人物として作中に登場する。福永がこの「少年」に象徴的な意味を持たせようとしていることは明白である。福永にとって「少年」とはどのような意味を持つ存在であるのか、今回の発表では明らかな類似性が認められる短編「夢見る少年の昼と夜」、「退屈な少年」を題材に考察を試みた。異なる作品に共通の特徴が認められるとき、それは単なる類似ではなく、その作品の成り立ちに共通の「原型」、すなわち作者の原風景、執筆動機、表現者としての精神構造が現れているはずである。「夢見る少年の昼と夜」、「退屈な少年」の二作品から読みとれる「原型」を書き抜くと以下ようになる。</p> <p>思春期前の「少年」が主人公。「夢〜」10歳（発表時著者の子息夏樹は9歳）、「退屈〜」14歳 夏樹15歳。少年はお坊ちゃんでガキ大将とは正反対のタイプ（「退屈〜」ではこの時代背景においてもベッドを使うような生活をしている）。父親は知識人勤労者。母親を喪失している。しかし父親は再婚していない（福永の親の世代としては珍しい？）。母代わりの若い女性が身近にいる。その女性に幼い性的な関心、憧憬を持っている。その一方で女性への幻滅も感じている。外国の珍しいものを入れた宝箱を大事にしまっている。宝箱の中身は誰にも見せない。父親、祖父による外国の象徴の品がある。ギリシャ神話に関心を持っている。転校[予定]による疎外感があり、友達がおらず、一人遊びをしている。しかし友達がいないことを全く苦にしていない。一人で遊べることは大事なことだと思っている（回りの大人に言われている？）。少年は一人で「神」あるいは「運命」のような哲学的存在を相手に遊んでいる。それは儀式を伴っていて、目を閉じ、願掛けをし、目を開けると強い夏の日差しがある。蝉が盛んに鳴いている。その泣き声は「ジーン」である。夏の風物としての蝉に関心があるが、生物学に詳しいというわけではない（蝉の子が鳴く！？という記述）。仲の良い友達（彼は寂しがりである）が病気で死ぬ。「作者」が作中で解説を行う。「少年」に対しては肯定的、大人に対しては肯定否定両面を描いている。愛に苦悩し挫折する大人を描くのに対し、少年は母親を喪った傷は持っていないも悩むことなく伸びやかな精神を持つ者として描かれる。作中の人物の年齢がはっきり判るよう記述されており、年齢へのこだわりがある。</p> <p>これらの共通点は常に作者自身の意識の中の最も内奥にあり福永武彦という精神を形作る「原型」である。「退屈〜」では複数の登場人物が描かれるが、「夢〜」の少年も含めてすべて「原型」を軸にして重ね合わせて理解することができる。そこにあるのは福永の甘美な少年時代の記憶であり、そうありたかった理想の姿であり、作品を通して福永が読者へ、或いは耻（なきはは）へ伝えたかった福永武彦その人の心である。福永は自身の少年時代の記憶を極めて甘美なものとして大事にしていた。作品に描いた「少年」は福永の自己愛の現れであり、仮に後の弓道部の事件、戦争、療養中に家族を喪失したことなどの経験がなかったとしても福永が書いたであろうテーマである。（引用）</p>
2	「夢見る少年の昼と夜」考	長谷部紫紺	第93回研究会における発表 HP 例会報告 6)より	2005/11	<p>先ず第1に著者の脳裏には、自身の出自に由来する要素も通底しているものの、他方『恐るべき子供達』の作家ジャン・コクトー、『赤と黒』のスタンダールの主人公、ジュリアン・ソレルはじめ欧米作家の描いた少年群像があり、作品の登場人物にデフオルメされて描かれている様に伺える。</p> <p>第2に太郎少年を取り巻く人々との心理と行動描写のテンポが、吾が邦既存の私小説リアリズム作品と異なり、極めて早く、希臘神話とオーバーラップさせたり、過去の時間を巧みに取り込んだり、ズームアップ、フェードイン、絞り込みはじめ、映画的技法が随所に見受けられる。往年の映画評論家として積んだ体験が全般のプロットを通し認められ、本作の大きな一つの特徴に数えられよう。</p> <p>第3に太郎自身の大切な秘密の品々を収めた青色の玉手箱と知の備忘録としての単語帳の存在。著者幼少の頃のファクトだらうか。メーテルリンクのチルチル、ミチルの追う神秘的な幸せの『青い鳥』が連想され、数々の呪文と相まって微笑ましい。</p> <p>第4に既知のフロイト分析による性的要因である。2年生の時、担任の女教師青山先生の胸を触ったり、終始変らぬ愛ちゃんへの絶ち難い思慕と好奇の念。蟹田アブクちゃん姉弟の取っ組み合い喧嘩へのサディズム的連想。</p> <p>怪獣の犠牲として荒磯に全裸で鎖縛りされたアンドロメダの姿態に漂うエロティシズム。夜の見世物小屋でのサムソン（村越先生）とダリラ（青山先生）の半裸形の立ち廻り。直ちゃんの姉の夜の女王（魔女）への変身等。</p> <p>第5に本作を巡る希臘神話について。原作末尾にマルルメ『古代の神々』に依るとの註記通り、希臘語原典からのものではない。アルゴス王、アクリシオスは、ダナエがゼウスの子ペルセウスを産み、この子が成人したら王を殺すとの予言を受け、二人を箱詰めて海に流した。流れ着いた島の王、ポリュデクテスはダナエを妃にと迫ったが断られ、牢に入れた。釈放の条件として、子ペルセウスがメドゥサの首取りに赴く。アテナ女神の支援で見事役を果し、帰途ケーベウス支配のエティオピアで、荒磯で断末魔の全裸の王女アンドロメダを救い、娶る。所で、メドゥサ女王はゴルゴーンと呼ばれ、元来は厄除けの力を持つ古い異邦の地母神で後年希臘神話に取り込まれ、見る者全てを石に変えた恐怖の存在として著名である。（引用）</p>

3	「夢見る少年の昼と夜」感想	参加者	第93回研究会における討議 HP例会報告 ⑥より	2005/11	<p>K氏 (男性) 新潮社版全集 第4巻</p> <ul style="list-style-type: none"> ・凝った文章で、『死の島』を連想する。散文というより、詩 (韻文) のような文章。 ・太郎少年を著者は使い分けつつ (無垢で幸福な少年と希臘神話に凝る知的少年)、上手にまとめている。 <p>S氏 (男性) 槐書房『夢みる少年の昼と夜』B版</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐多稲子氏も言うように、夜の部分に比べて昼がよく書けている。 ・夢は一般に「浅い眠り」(ノンレム睡眠)の状態で見ると、最後の場面からも、この少年は「深い眠り」に落ちている。この点、納得できない。 ・希臘神話に、余り過剰な意味付けをしないほうがよい。 <p>Mさん (女性) 東京創元社 『心の中を流れる河』元版第3刷</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小説としては、物足りない 説得力に欠ける。 ・母の記憶がない、という太郎の記述がおかしい (わからない)。福永には、本当に母の記憶が全くなかったのか？ ・記憶は「思い出すこと」で育つもの。記憶というものを、意識的に再考するキッカケになった。 ・希臘神話が、太郎の消された記憶の埋め合わせのように使われている。 <p>T氏 (男性) 東京創元社 『心の中を流れる河』元版初刷</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福永作品にはモノローグの使用が多いが、この作品は太郎の内面の連続性をよく捉えている (大人のロジックではないが)。 ・希臘神話は、初級レベルの使い方。この作品では、それほど重要な要素ではない。 ・Mさんの意見に関連して) この作品から、福永本人の体験を結び付けても意味はない。 ・作家福永としての視点から叙述している箇所も多い。子供はもっと単純な筈。最後は作文のようだ。創りものとしては巧いが、臼井の批判は当たっている箇所もある。 ・短時間で時間をかけずに書いた作品で、福永作品として、それほど重いものではない。 <p>U氏 (男性) 新潮文庫版 『夢みる少年の昼と夜』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この作品、太郎が床から抜け出すところが「夜」なのか？ モノローグの部分が「夜」とは言えないか？ ・小川未明の童話に、希臘物はあったか？ ・ペルセウス=ウルトラマン=ハリー・ポッターという連想が働いた。 ・短篇「沼」を連想した。「沼」にモノローグを付けると、この「夢みる～」になるのではないか。 <p>Uさん (女性) 新潮文庫版 『夢みる少年の昼と夜』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も子供の頃よく空想した。起きている時、自分の世界に入り込む時間が愉しかった。太郎のモノローグは、その頃の自分を思い出させてくれる。 ・太郎は、無意識のうちに母の死を考えないようにしつつも、青山先生に母を見ている。これは、悲しいこと。 <p>M (男性) 新潮社全小説版複写 槐書房版B版</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この作品のナレーションを、文庫版解説で篠田一士は3つに分けている。私は、①会話 ②太郎のモノローグ (内面) ③客観叙述 (I 太郎の視点から周りを叙述する II 外部から太郎[の心の中も含めて]を描写する)に分けたい。 ・細部で拘りたい表現がたくさんある作品。重層的意味を持つ象徴的表現を多用。 ・「昼」の部分と「夜」の部分での (同一) 語句の対応。例えば最後で直ちゃんが「僕、姉さんに悪いけど助けてあげる」というのは、直ちゃんの姉さんが「夜の国の女王」だから (全集42頁、57頁の「白粉の濃い、口紅の～」という同一記述でわかる) など。 ・ボンボンの丸い罐が「青い色」に塗られているのは、希臘神話で①ダナエとペルセウスがアクリシオスに閉じ込められたのは、「青銅の密室」だったから？ ②ペルセウスがアテナ女神から鏡のように磨かれた「青銅の盾」を借りたから？ ③ マラルメ「古代の神々」によれば、ペルセウスの父ゼウスとは「澄み渡った青空」という意味であるから？ など様々推測することは、面白い (長谷部氏のコメントにある『青い鳥』への連想あたりが正解か?)。この「青色の罐」への注目は、渡辺啓史氏より示唆を受けた。 ・太郎の「単語帳」は、マラルメの作品「単語帳」から何らかのヒントを得た可能性がある。 ・太郎がお鹿さんと会話する言葉使いと、青山先生や村越先生と会話する際の言葉の相違に、階級差を見る。(引用)
---	---------------	-----	-----------------------------	---------	--